

「大熊町でしか生きられない」

松永秀篤

## 自己紹介

- ・ 大熊町生まれ大熊育ち チャッキチャッキの大熊っ子
- ・ 町内は大家族が多く、私も13人家族でした
- ・ 大熊町は「フルーツの香り漂うロマンの里」。梨とキウイが特産品。私も農家でした！キュウリなどの野菜と米を生産していました
- ・ 大熊町議会議員を4期務めました
- ・ 熊川稚児鹿舞保存会会員です



## 震災前の大熊町

- ・ 絆の強い町柄でした
- ・ ゆい、早苗饗
- ・ 町民体育祭
- ・ もちつき
- ・ 盆踊り
- ・ 鮭 海
- ・ 宴会三昧
- ・ 団結力
- ・ 原発が誘致され 出稼ぎがなくなり父が一年中いる生活になった



**東日本大震災と福島第一原子力発電所事故により町は一変した**

## 発災当時の様子（大地震、津波、原発事故）

- ・ 2011年3月11日14:46 大きな揺れ 議会の委員会の最中
- ・ 大津波警報、海岸線の自宅へ。地震による被害はさほどではなかった
- ・ 15～16メートルの高さの津波が一気に押しつぶす。36件の住宅が一瞬にして被害に
- ・ 3月11日21:23 3km圏内に避難指示、翌3月12日早朝に10km圏内、午後には20km圏内に



## 避難生活のはじまり 町民の様子・心情

- ・ 着の身着のまま すぐに帰れると思っていた
- ・ 安全神話にどっぷりつかっていたから
- ・ しかし、長い避難生活で不安が増した



- ・ 町は会津若松に避難を決める。  
軒下に2メートルの雪があった大熊町。  
「こんなどこさいたら死んじまう。おめえら何にもしねえがらだ！」  
不平、不満、不安の矛先が我々議員とか町役場の職員に向けられた。

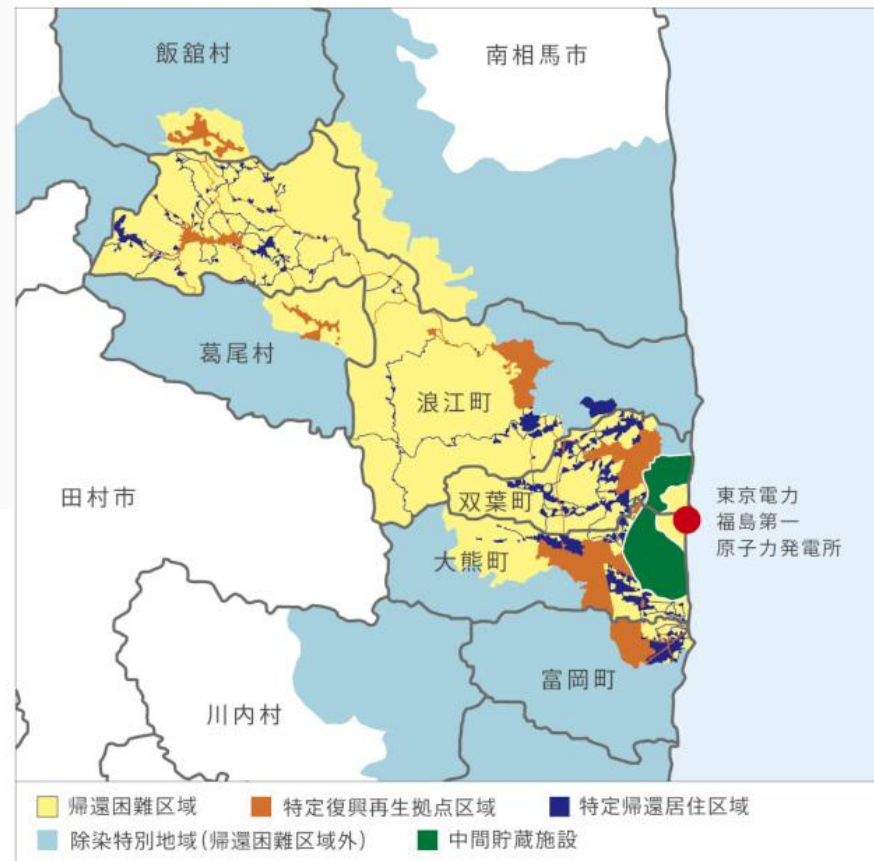
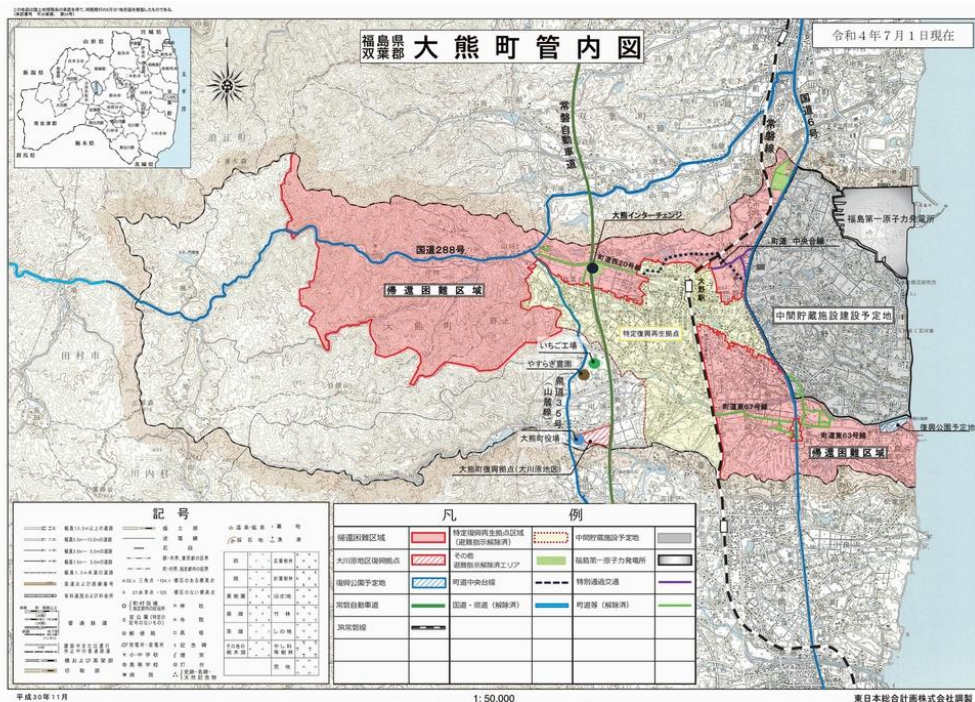
なぜこんなに罵声を浴びなければならないのか？と国を恨みました。

でもいつか、大熊町に戻れるまでは頑張ろうと思っていた。

## 全町避難が長期化することでの問題

- ・ 大家族のつながりの維持が困難に
- ・ バラバラの場所にいるためもともとの行政区のつながりの維持が困難に
- ・ 体育館⇒旅館など⇒仮設住宅・みなし仮設⇒避難先で家を建てる  
※いつ帰れるかわからない状況が続いたため避難先で家を建てる方が増加  
「諦めの気持ち」
- ・ **みんなが全国バラバラであるがゆえ情報が届かない**
- ・ **誰がどこにいるのかわからない**
- ・ 長期化することで帰る人が極端に減ってしまったこと  
長期化しなければ家を建てないで我慢できたかもしれない
- ・ 町内でも避難指示の区域によって状況が異なり分断が懸念される

# 生まれ育った場所、熊川は今も中間貯蔵施設・帰還困難区域



生まれ育った場所、熊川は特定帰還居住区域でもある

## 震災から8年後、2019年に大熊町に帰ってきました

- ・大熊町の現状 震災前の人口 11505名。現在は町内居住者1000人ほど。
- ・農業も再開してます！
- ・熊川稚児鹿舞も活動中！



# 絆づくりはにぎわいづくり

- ・ おおくまコミュニティづくり実行委員会でなつ祭りやもちつきを実施



# 絆づくりはにぎわいづくり

- ・ おおくまコミュニティづくり実行委員会でなつ祭りやもちつきを実施



# 絆づくりはにぎわいづくり

・大熊町ひまわりプロジェクト



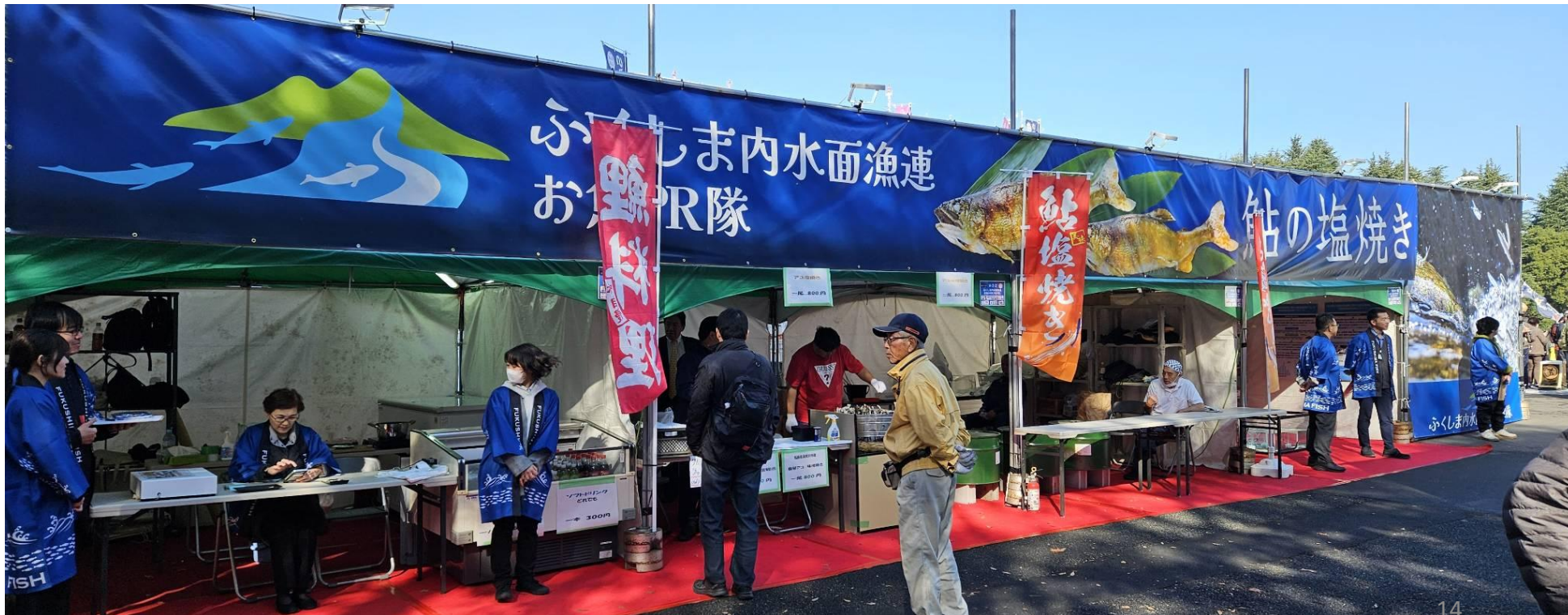
# 絆づくりはにぎわいづくり

・ おおくままち3.11のつどい実行委員会



# 絆づくりはにぎわいづくり

- ・熊川漁業協同組合
- ・大熊町有害鳥獣捕獲隊
- ・防犯指導隊
- ・おおくま国際交流協会



# 絆づくりはにぎわいづくり

・ おおくま国際交流協会

